【複式提案】

問いがつながる複式教育
～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

１．研究テーマ設定の理由
（１）学校提案とかかわって

複式学級における「問い続け，学び続ける」とは，教師の働きかけだけではなく，子どもたち自身が主体的に学習活動の中から新たな課題を見出したり思考を再構築したりしながら，問いを深めていくことだと考えている。学びの中で生まれる課題は，一人で完結するものではなく，学び合いの中で多様に変化を遂げながら解決されるものである。そのような学び合いを実現させるためには「誰かの問いは自分たちの問いである」というような受容的な関係が必要ではないだろうか。そこで，複式部の研究テーマを「問いがつながる複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」とした。教師は，子どもたちの問いや考えをみとり，それらが効果的につながるような支援を行うことで，新たな学びが生まれると考えたからである。

本校複式部は，同時間接指導を軸にして研究を進めている。子どもたち自身が，複式学級の特性を活かし，司会進行を務め記録し話し合う中で学習内容を確実に身に付けた上で学びを深め高めていくことをねらいとしている。また，複式部では，少人数指導・異学年交流などその特性を活かした学習課程を組み入れ，複式学級における効果的な指導の在り方を追究することとした。少人数による学習では，一人一人に発言の機会をもたせることや具体物の操作や体験などの場を保証することが多くの場面で可能となる。また，異学年交流の特性を活かし学年相互間での学び合いが可能となる。学習経験の異なる子どもたちが互いに関わり合う機会を意図的に取り入れることにより，新たな気付きが生まれ，自分の考えを広げたり，深めたりすることができる。これらの複式教育の有効性を活かした指導法を軸として研究を深めている。

（２）サブテーマ「子どもの言葉でつくる授業」とかかわって

複式教育における有効性を実現させ，子どもたちが主体的な学び手となるためにはその基盤となる力を子どもたちに身につけさせていかなければならない。その一つが表現力やコミュニケーション能力の育成である。複式学級の特性である少人数指導の授業では，30人規模の学級と比較して多様な意見の交流や子どもたち自身の学び合いの範囲も狭くなる。また，６年間を同じ教室で過ごす子どもたちの人間関係も固定化されがちである。それらの課題を克服し，より質の高い学びを深めていくためには子どもたちが豊かに自分自身を表現し，友達と関わろうとする力を培っていかなければならないと考えている。

子どもたち一人一人が課題に対して様々な考えを出して話し合い，認め合うことでお互いの言葉をつなぎ，考えを深め合い，追究していくことこそが複式学級における「子どもの言葉でつくる授業」である。

また，複式学級の学びにおいては，間接指導※1時に司会と記録を子どもたちが行い，自分たちで自主的に進めていくことが重要となる。そのためには，まず，学びの基本的な流れを共有するとともに，授業を進める技能を子どもたちに身に付けることが必要である。

複式部では，学びの基本的な流れと授業を進める技能を以下のように考えている。

〈参考資料〉

学びの基本的な流れ	授業を進める技能
①課題を確かめる ・疑問を明確にして課題とする ・学習目標を設定する ②見通す ・どのような学習活動が適切か ・授業の終盤ではどうなっていたいのか ③調べる，考える（ひとり学び） ・課題に対する自分の考えをまとめる ・考えを伝え合うための準備をする ④深める（ペア学習やグループ学習）	司会者 ・学習活動の時間を適切に設定する ・発言，ミニボードの利用，ノートや具体物の提示など，発表の方法を指示する ・発言を受けて様々に聞き返す ・学習の流れを決める 記録者 ・学習活動や発言を短くまとめて記録する ・囲む，線で結ぶ，文字の色を変える フォロワー※2

間接指導※1…教師が一方の学年で指導しているとき，他方の学年の子どもたちに，自分たちだけで学習を進めさせること。

フォロワー※2…司会者，記録者以外の授業に参加する子どもたち全員を指す。

・考えを表出して伝え合う ・全体で吟味してより良い考えに高める ・課題を深める ⑤まとめる ・学習目標を達成できたか ・どんなことがわかったか	・司会が滞った場合にアドバイスする ・記録の補助を行う ・相手に伝わりやすい発表方法を選択し，短くまとめて話す ・発言内容について考えながら最後まで聞く ・立場や考えを表情や頷きに表す

（2）複式学級でめざす子ども像

複式学級で学び合うためには，友だちの考えを大切にし，自分の考えも大切にされるという学級風土を形成し，一人一人が安心して取り組めることが重要である。

①友だちの話を聞くことができる子ども

子どもたちで学び合うためには，「聞く」ということが大きな位置を占める。ただ表面的に聞くのではなく，受容的に聞くことが大切だと考えている。受容的に聞くとは，最後までじっくりと聞く・発言を繰り返せるように聞く・言いたいことを考えながら聞くなどである。友だちの意見を聞き比べ，話し合いの方向性を見出していく。

②友だちの考えに共感し，話し合いを楽しめる子ども

自分の考えを素直に出せることや，肯定的に受け入れてもらえることの安心感が，話し合いを楽しむという学級風土につながる。相手の考えに興味をもち，相手の考えを楽しみにできる子どもを育てたい。また，話し合いの重要性や価値を感じさせるような課題を設定し「この友だちとだから解決することができた」というような経験をさせたい。

③主体的に学び合う子ども

複式学級で主体的に学び合うには，「新たな問いを見つけることができるか」「自分たちの学びが学習目標から外れていないか」ということを常に認知することが求められる。また「自分たちの学びが目標に向かって高まっているか」を認知できる力も育てたい。明確な課題設定を行うことや本時や単元の終末に学習をふり返る機会を設ける。

２．複式学級における「問い続け，学び続ける子どもたち」

（1）複式学級におけるみとりと支援

複式学級の授業は，少人数のため考えをまとめやすい環境にあるが，一人一人の考えに深く触れて違いを見出したり，深めたりしようとしなければ，それ以上の学びにつながりにくい。正解のみを求めたり，事実としてとらえたりするだけではなく，表現されていないものや考えの奥に隠れているものを探れるようになってほしい。そのため教師は，子どもたちの理解・認識・立場・考えの過程・関係性を丁寧にみとることが必要である。また，別の視点で対象に出合わせたり，説明を求めるたり，理由や考えの過程を表出させることにより，子どもの考えをつなぎ支援する必要がある。しかし，間接指導時には子どもたちの考えをみとりにくい。そこで，子どもたちの考えを板書記録・ワークシート・ノートなどに残させることによってみとり，支援することが重要である。

（2）複式学級における「問い続け，学び続ける子どもたち」の姿

①学びを追究する子ども
- ・物事に働きかけ疑問をもつ
- ・解決への見通しをもち，様々な方法を考える
- ・身につけたことをもとに，考えを深めたり広げたりする

②他者との関わりを大切にする子ども
- ・友だちの考えを受容的に捉える
- ・友だちの考えを聞き，自分の考えを深めたり広げたりする
- ・友だちとの話し合いの中から，新たな課題を見つける

③学びを実感する子ども
- ・学んだことを活かし，新たな課題に取り組む
- ・友だちとの関わりから生まれた問いを課題とし，自分たちで解決をめざす
- ・自分の考えを再構成する

（３）実践例

小学校学習指導要領解説算数編において５学年では，乗数・除数が小数の場合にも乗法や除法が用いられるという意味の拡張が主たるねらいであるのに対し，６学年では，乗数・除数が分数の場合の乗法や除法の計算の仕方を考え，それらの計算ができるようにすることが主たるねらいとして記されている。「意味の拡張」と「計算の仕方」という違い「小数」と「分数」といった違いはある。しかし，整数の場合をもとにして小数や分数の場合も乗法や除法が成り立つことを類推的に思考することや，いくつ分の値を求めること，１あたりの値を求めることなどに違いはない。扱われる数の違いを越え，子どもたちが課題の中から共通性を見出し学びを深める機会となることを期待し,単元を構成した。

＜授業の実際＞

本時は，５年生は１ｍあたりの値段，６年生は１ｋｇあたりのチーズの量といずれも等分除の思考を用いて１あたり量を求める課題である。１より大きい整数の比較量を提示すれば，子ども達は既習を活用し，比較的容易に場面を捉え解を求めることができる。しかし，比較量が小数や分数になったとき，等分除の思考を用い，整数と同じように課題を捉え演算決定することは難しいと考えた。

そこで，比較量をあえて様々な演算を活用して解ける１／２という値にすることにした。

５年生課題

課題①
0.5mのリボンが96円で売っています。
このリボン1mの値段はいくらでしょう。

S1　96×２
0.5mと合わせたら，１mやろ。
0.5だけやったら１倍，合わせたら２倍

６年生課題

課題①
1/2枚のピザを作るのに，チーズが
5/6kgいりました。このピザを一枚
作るのにチーズは何kgいるでしょう。

S1　5/6×2
1枚だったら1/2枚が2つで1枚になるから，
S2　5/6+5/6
1/2が２つで１枚になるから，3/5がもう一つで１になる。
T　1あたりの値段（量）は，何算で求めることができますか。
S　かけ算
足し算・・・
S3　わり算でもできかも，でも・・・。





子どもたちにとって1/2という値は特別であり「半分」や「2つで1」という言葉に置きかえられる。結果，両学年ともに乗法が用いられたのである。S3の「わり算でもできるかも・・・。」というつぶやきに期待をしたが，それは先行学習による立式であり，その演算決定の理由を話すまでには至らなかった。

そこで，次に比較量を小数と分数に置きかえて課題を提示した。

課題②
0.8mのリボンが96円で売っています。
このリボン1mの値段はいくらでしょう。
S1　９６円を８等分にする。0.1mが12円なんよ。
　分かる？

S2　0.1m?
S1　0.8を８つに分けたら0.1m。
　だから96円を８等分にすると0.1m12円なんよ。
　12円×2して24円。0.2＋0.8は１になるやん。
　96円＋24円で120円

課題②
5/6枚のピザを作るのに，チーズが
　3/5kgいりました。このピザを１枚
　作るのにチーズは何kgいるでしょう。

S2　さっきは，ちょうど半分やったから・・・
　　整数とかだったから割ってちょうど１とか
　になったけど
　　今度は，５／６やから・・・。
　　何かけたり，足したり，割ったりしたらえ
　えんか分からん。
Ｔ　難しい数字？。
S1　5/6
Ｔ　じゃあ，この数字変えよか。
S3　何でもいいん。
S　分数とか・・・
　　できるだけ小さい方が・・・
S　５　２　１
S6　１やったらそのままやん。
　もう答え出てるし・・・。

S1　３／５÷２＝３／１０
　　３／５÷１＝３／５
　　３／５÷５＝３／２５

S2　ちょっといい。全部わり算になってる
　３／５　÷　□　，
　それに当てはめて考えたら・・・。

先にも述べたように，本時は「意味の拡張」と「計算の仕方」という違いや，「小数」と「分数」といった違いがある。しかし，整数の場合をもとにして小数や分数の場合も乗法や除法が成り立つことを類推的に思考することや，いくつ分の値を求めること，１あたりの値を求めることなどに違いはない。

授業の終末に，子どもたちがお互いの課題や学びの足跡を見て扱われる数の違いを越え，子どもたちが課題の中から共通性を見出し，学びを深める機会となることを願っていたがその成果は十分に達成されたものではなかった。

しかし，複式教育の特性，２学年の子どもたちが同じ教室で学ぶという価値の１つはここにある。異学年がどのようにつながり合い，学び合うことでその価値を見出していくことができるのか今後も研究を進めていきたい。

３．研究の展望

学び合いの場を生み出すみとりと支援を充実させるため，以下の点を重要視して研究を進める。

① 少人数学級の特性を活かした授業づくり

単式学級における少人数指導の利点が，複式学級においてすべては当てはまらないというのが現実である。少人数であるから，教師が一人一人に多くかかわる時間がもてるというのは，まさにその一例である。しかし，言葉を返せばそれは子どもたちが相互に学び合う活動を充実させることができるということである。このように，本校複式部では，子どもたちが主体的に関わり合い学び合う姿を実現させるために研究を進めている。少人数学級では，様々な活動において一人一人がより強く相手意識をもち自分の考えを表現する機会を多くもつことができる。人との関わり方や話し方，書き方などの表現力の育成を図ることが重要である。また，少人数の特性を活かし，一人一人がものに触れ体験的な学習活動の充実を図りたいと考えている。

② 複式学級の特性(異学年交流)を活かした授業づくり

複式学級では，異学年の子どもたちが同じ教室で学ぶという特性がある。少人数学級における学習活動では，意見の多様性や固定化された人間関係の中で学習に対する新たな刺激や学習意欲に欠ける場面もある。異学年の子どもたちが関わる学習活動を取り入れることにより，多様なものの見方や学習に対する刺激を生み出すことも有効な手段である。また，異学年の子どもたちが交流することにより思考の高まりや深まりも期待できる。

さらに，同領域の学習内容を単元構成することで，互いに学び合うことが可能になると考える。上学年は既習事項の想起することで学習を振り返り，下学年は，学習に見通しをもつことも期待できる。つまり，系統的・統合的な学習効果を生み出すことができるということである。

異学年の子どもたちが，年少から年長へと育っていく中で主体的に学習活動に参加し，主体的に役割を担い，学び合うことの大切さに気付く学習活動を単年ではなく６年間という継続した学びを繰り返すことにより効果的に学習集団として機能させていきたいと考えている。

③ 単元構成や課題を工夫する

子どもたちの多様な疑問や考えが引き出せるような単元構成や課題を工夫しなければならない。そのためには，子どもたちが興味や関心をもちやすい対象を準備する必要がある。子どもたちにつけたい力を明確にした上で，身近にある対象と深く関われるようにすることで，課題意識を深められると考えている。特に複式学級では，間接指導の時間があるため，単元導入における子どもたちの課題意識に対する確かなみとりと支援が必要になる。

課題意識をみとるには，子どもたちの学習経験をみとることが大切である。単元を構成する上で，既習内容が指針になることが多いからである。しかし，既習内容をなぞるような学習では，新たな問いや学びは生まれにくい。そこで，教師は子どもたちに寄り添いながらも新たな問いや学びに導くことが重要である。そのためにも，教師の確かなみとりと教材研究を深めることが重要となる。

④ 主体的に学び合う子どもを育てる

子どもたちが主体的に学び合うためには，全員が課題解決のための見通しをもつことが必要だと考えている。そのため，単元導入時に子どもたちに課題を挙げさせたり，単元を通しての目標を立てさせたりするなど，単元全体の見通しをもてるようにしたい。１時間の授業では，学習計画を作成させるなどして課題解決のための過程に見通しをもたせたい。

また，振り返りを大切にし，自分たちが選択した課題解決の方法は適切だったか自己評価し，改善できるように支援したい。そのため，異学年の子どもたちが互いの授業を参観し合うことで，客観的で子ども目線の評価と授業改善ができると考えている。さらに，授業の振り返りだけではなく，単元を通した振り返りも充実させたい。そうすることで，単元同士がつながり，その単元に応じた学習計画を立てることができると考えている。

⑤ 授業における教師の出番を明確にする

間接指導時は，子どもたちが主体的に学び合い，学びをデザインできる時間である。しかし，子どもたちだけで学びの質を高めることは難しい。そこで，学習内容の価値を教師が十分理解し，子どもたちの実態をみとった上で，適切な発問や指示を出す必要がある。待つべきところは待つ，教えるべきところは教えるというように，１時間の授業においての教師の出番を明確にして指導を行うことが

大切だと考えている。

⑥ 学び方を学ばせる

子どもたちが主体となる複式授業では，子どもたち自身が司会や記録を行う。司会者には，授業を進める技能だけではなく，発言をまとめたり，考えを引き出したりする技能が必要とされる。記録者には，フォロワーの発言を要約してわかりやすく板書する技能が必要とされる。考えを記録することで，互いの考えに触れやすくなるだけではなく，学びの足跡を残すことにもなる。フォロワーは，自分の考えを表出して伝える技術や話し合いを深めるための技術を身に付ける必要がある。さらに，司会者や記録者を助けながら授業を進めることも大切にさせたい。

子どもたちに学び方を学ばせるため，発達段階を考慮した目標を設定し，次のような表を作成して指導に活かそうと考えている。

	低学年	中学年	高学年
学び方	教師の支援を受けながら学び方を知り，様々な学習形態を経験する。	教師の支援を参考にして課題解決に合った学び方を選択し，自分たちで学習を進める。	自分たちで課題解決に最適な学び方を選択し，学習を効率良く進めて学びを高める。
司会者	・司会の役割を自覚し，基本的な学習の流れに沿って進行する。 ・順に意見を聞くなど，偏りなく指名する。 ・指示を出したり，発言を求めたりする。	・学習課題に合った学習活動を選び，活動時間を設定して進行する。 ・同じ考えや違う考えを分類しながら指名する。 ・全体の様子を見て指示を出したり，発言を次につないだりする。	・学習課題によって臨機応変に対応し，適切な方法を選んで効率よく進行する。 ・相手の意見を受けて，関連付けながら指名する。 ・場の状況に合わせて個別の指示を出したり，発言をまとめたりする。
記録者	・適切な大きさの文字で単元名や発言内容を板書する。 ・大事なところを線で囲んで目立たせるなど，工夫して書く。	・課題や学習活動など，大まかな学習の流れを板書する。 ・誰が発言したか分かるようにしたり，立場と理由を色で分けたりするなど，工夫して書く。	・学習活動や発言内容を分類して整然とまとめ，学習の流れを明確にして板書する。 ・反対意見や追加意見を効果的に書き加え，発言内容を線で囲んだり，矢印で関連性を示したりするなど，工夫して書く。
フォロワー	・相手の方を見て，聞きやすい声の大きさで自分の考えを話す。 ・話し手を見て，発言の最後まで聞く。 ・相手の意見との違いに触れながら適切な考えを見出そうとする。	・相手との関連を挙げながら自分の立場を明確にし，理由をつけて話す。 ・話し手の考えを理解しようと努力し，表情に表したり頷いたりしながら聞く。 ・相手とともに新たな考えを生み出したり，深めたりしようとする。	・相手の考えに触れたり，視点や論点を明確にしたりして，整理しながら話す。 ・話し手の意図を捉え，自分の考えと関連付け，考えを深めながら聞く。 ・相手と考えを伝え合い，より適切で価値の高い考えを生み出そうとするとともに，自分の考えの変容に気付く。

４．研究の評価

授業の様子を記録したビデオ・音声・写真・ノート・ワークシートなどを用い，できるだけ詳細な授業記録を作成する。学び合いの場を生み出すみとりと支援がどのように成立していたかについて，その授業記録を「Aのようにみとり，Bのような支援を行うと，Cのように子どもたちの学びが高まった。」「Dと発問することで，子どもたちが主体的に学び合う姿が見られた。」のように分析して評価を行う。

複式国語科 1･2年Ｆ組	「会話文」の名探偵になろう～物語の中にいる自分と出会う～ １年生「くじらぐも」　２年生「お手紙」	宮脇 隼

１．単元について

１・２Ｆでは，「音読×名探偵」をキーワードに１学期の学習を進めてきた。これには，自分たちが目指す音読をするために，テキストの細かな情報や友だちの小さな変化に気づいて欲しいという願いを込めている。

１年生の子どもたちは，ひらがなやカタカナの学習と並行して様々な音読の学習をしてきた。「はなのみち」や「おおきなかぶ」では，場面の様子に合せて音読を変化させることを学習した。また，「おむすびころりん」では，リズムや語感の良さを味わって読むことができた。本単元では，会話文に焦点を当て，音読が動作化に与える影響や，動作化から生まれる音読の気づきを大切に進めていく。

２年生の子どもたちも１学期はいくつかの作品を通して自分たちが考える音読表現を探ってきた。「ふきのとう」では，役割になりきって音読をした。また，「スイミー」では，８人を二つのグループに分け音読発表を行った。その際には，それぞれのグループはスイミーの立場に立って新たな会話文を考えた。そうすることで，子どもたちはスイミーの世界に入り音読を楽しむことができた。本単元では，中心人物の二人になりきって音読をさせたい。その際，会話文を中心とした読み取りから中心人物の気持ちを考えさせる。

どちらの学年も会話文に焦点を当て，それぞれの教材がもつ特性を考え，この教材だからこそできる音読の表現を子どもたちと探っていく。

また，文章の読解だけを進めるのではなく，子どもたち一人一人の「僕ならこんなとき，何と言うだろう。」や「この登場人物は，私に似ているな。」という気持ちを大切に進めていく。物語の中にいる登場人物と自分を重ねながら，登場人物になりきって音読劇を発信していく。

【授業者が考える教材の特性と，そこから考える音読表現】

	１年生「くじらぐも」	２年生「お手紙」
教材の特性	＊１年生「くじらぐも」は，同じ言葉を使った会話文が繰り返される。しかし，同じ言葉を使いながらも場面によって少しずつ状況は変化している。登場人物の様子や，関係の変化を考える。同じ人物による繰り返し【変化・成長】と，違う人物による繰り返し【関係性】とする。 【変化・成長】 くじらぐもに向かって，一生懸命に手を伸ばそうとする子どもたちの気持ちの変化・高まりを表現するためには，物語の中の子どもたちが行うジャンプの高さの変化を読み取ることが効果的である。実際に，子どもたちと動作化をしながら表現をすることで音読の変化を考えていく。 【関係性】 最後の場面で，子どもたちとくじらぐもの別れの音読を考える際にも，動作化を大切に行う。これまでの子どもたちとくじらぐもの関係性をもとに，どれくらい手を振っているのか。または，どれくらいの高まりで「さようなら。」と言っているのかをこれまでの読み取ったことから見つけさせたい。	＊２年生「お手紙」は，会話文の掛け合いで物語が進んでいく。そして，この会話文には連続するところと，間に地の文が入り会話文が連続しないところがある。本単元では，会話文が連続するところを【会話文の連続】，間に地の文が入るところを【会話文の非連続】としている。 【会話文の連続と非連続】 本教材中に，会話文の連続は６箇所あり，そこに登場人物の心情が大きく変化するのではと考えている。これは，作者または翻訳者が意図的に作り出しているものであると考え，子ども達に気づかせたいポイントである。そして，その連続した会話文の読みを特に工夫することで子どもたちの音読表現と，物語の理解は深まっていくと考えている。また、「お手紙」の学習と並行して読み進めている他のシリーズを読む際にも学習したことがいかしやすい。子どもたちは、「お手紙」で獲得した【会話文の連続】と【会話文の非連続】をもとにした音読劇につなげさせたい。
音読表現	動作化，大勢の読み，声の強弱 →８人で行う，身体と心で味わう音読劇	会話文の掛け合いと地の文のバランス，多読（シリーズ） →２～３人で行う，会話の掛け合いを楽しむテンポを楽しむ音読劇（漫才風）

２．単元設定の理由

（１）本実践の主張点

【複式】単元を通した目標をそろえることで，主体性をもった異学年の交流が生まれるであろう。

【国語】一つ一つの作品にはそれぞれの「特性」があり，それに気づかせることで，作品にあった音読表現を工夫する子どもが育つであろう。

（2）教科提案とのかかわり

【複式】　問いがつながる複式教育 ～学び合いの場を生み出すみとりと支援～	【国語科】　つながりを意識して考える力を育む

複式部では，本校の研究テーマをうけ「問いがつながる」ことに重点を置いている。子どもたちが自ら問い続け，学び続けるためには，一人一人の課題意識が大切であり，友だちの問いに共感や同調，ときには反論するなど，友だちの考えを自分の中に取り入れることが必要となる。そして，友だちの考えの中から，自分たちが深めていきたい問いを見つけていく。本単元では，互いの学習を進めていく際に異学年で交流を大切にしていく。１年生の音読に対しては２年生からのアドバイスや，あたたかい声かけなどが有効である。２年生にとっても，１年生へのアドバイスから自分たちの課題がうまれることもある。また，１年生にいいところを見せたいという考えも，２年生にとっての大きな原動力となる。

国語部では，「つながり」を子ども同士のつながり，子どもと教材のつながりとしている。音読劇は，一人で完成できるものではなく，友だちとの関わりがあってこそのものである。本単元では，どちらの学年も音読劇をするという同じ目標を設定し，特に会話文に焦点を当てている。物語の中にいる登場人物に自分と似ているところや，自分だったらどうだろうという視点をもたせながら教材とつながり，音読の表現方法を考えるなかで子ども同士のつながりをもたせていきたい。

３．単元目標

１年生「くじらぐも」	２年生「お手紙」
○同じ言葉でも場面の様子によって登場人物の心情が変化していることに気づき，あった読み方を考えることができる。 ○読み取ったことをもとに登場人物の話し方を考え，動きを入れて音読劇をすることができる。	○会話文と地の文の関係に気づくことで，登場人物の心情を捉えることができる。 ○読み取ったことをもとに登場人物の話し方を考え，読み方やテンポを工夫した音読劇をすることができる。

４．単元計画（全 12 時間）【本時８時間目】

１年生「くじらぐも」	２年生「お手紙」
１次　学習の見通しをもとう。	
①今までに学習した音読発表を思い出し、音読劇との違いを考える。 ②もしも，本当に「くじらぐも」がいたらどんなことをしてみたいか。どこに行ってみたいか考える。（初発の感想）	①今までに学習した音読発表を思い出し、音読発表（漫才風）との違いを考える。自分たちが発表する作品を決める。 ②自分とかえるくん，がまくんの似ているところや似ていないところを考える。（初発の感想）
２次　それぞれの作品の特性を見つけ，「会話文」の名探偵になろう。	
③同じ内容の会話文が何度も出ることに気づき、「おおきなかぶ」を思い出しながら、毎回読み方が違うことに気づく。 ④⑤⑥⑦⑧⑨同じ内容の会話文や登場人物の動きに着目し、自分だったらどのような気持ちになるのかを考えながら、それぞれの場面の読み方を考える。（本時は８時間目）	③会話文が連続しているところと、地の文が間に入っているところの違いに気づく。 ④⑤⑥⑦⑧⑨連続する会話文に着目し、自分の経験も考えながら、それぞれの場面の会話文の読み方を考える。また、学んだことを選んだ作品の読みにいかす。（本時は８時間目）
３次　複式学級のみんなの前で、音読発表会をしよう。	
⑩⑪⑫会話文や登場人物の動きに着目して音読劇の練習をする。そして，発表会をする。	⑩⑪⑫連続する会話文に着目して音読劇の練習をする。そして，発表会をする。

５．本時について

本時は，それぞれの作品の特性をもとにした読み取りから、自分の経験や自分の思いを大切にして音読を楽しむ学習を考えている。さらに，２年生は本教材とともに自分たちが選んだ作品も並行して音読表現を考える。会話文を手がかりとし一人一人が自分の読みをもち、クラス全体で素晴らしい作品の世界に浸ることができるような時間にしたい。

複式算数科 ３・４年Ｆ組	３年生　分数 ４年生　分数	川村　繁博

１．単元について

生活場面で子どもたちの中に分数がどのように息づいているのかと考える。教科書で扱われる１mの１／３の長さ１／３mや１Ｌの１／４のかさ１／４Ｌなどといった表現に出合う機会はどれだけあるだろうか。まして「ジュース３／５Ｌのうち１／５Ｌを飲みました。」といった場面を感覚的にでも意識しながら経験することなどは日常生活の中ではまれなことである。

端数処理のために用いる分数についても，子どもたちの生活場面でそれほどの精度が求められる場面はほとんどない。１mのリボンを３人で分けたとしてその長さを数値として正確に表現する必要性はない。それは，それらの場面で子どもたちが必要とするものは，見た目や感覚的なものに頼るところが多く，それほど細かな数にこだわることもないからではないだろうか。子どもたちにとって分数は，整数のように身近に存在する数とは言い難い。さらに，分数は分子と分母の２つからなる数を１つの数としてみなければならない。これらのことからも，２つの数を操作して作られた分数という数は，それだけで子どもたちにとって高度な抽象化された数であると考えられる。

実際に，第５学年の分数の学習で「２mのテープの１／３の長さは何mでしょう。」という問題に出合ったとき，「１／３m」と答える子どもたちも少なくはなかった。なぜ，このような間違いが生まれるのであろうか。「一本という言う基準」「１mという基準」の混同が原因ではないかと考える。つまり，第２学年での既習である「分割分数」と３学年で出合った「量分数」に区別があることを子どもたちは十分には感じていないのかもしれないと考える。だからこそ，２mという長さが１本という規準量に置きかえられこのような誤答を生むのではないだろうか。

「分数」の目標は，分割分数としての分数の意味，端数を表す分数の意味の理解を深めることである。本単元では「分割分数」と「量分数」を比較し，それぞれの分数のもつ意味の違いを捉えさせたい。また，それらの活動を通して分数を具体的な数として生活の中にある算数的な事象と重ね合わせることで豊かな数感覚・量感, 数概念を培うことができるのではないかと考えている。

２．単元設定の理由

（１） 本実践の主張点

様々な種類や大きさの違う分数を比較することで分数の概念を形成することができるだろう。

子どもたちは，第２学年と第３学年で「分割分数」と「量分数」に出合う。両者の最大の違いは「基準となる１にあたる量」が明瞭に定められているかいないかにある。しかし，その両者の違いを子どもたちがどれほど実感し理解をしているのだろうかと感じる。私自身が小学生の頃に分数と出合ったとき，両者に違いがあるかどうかを考えるばかりか，意識することもなかったとすら考える。前項に上述した「２mの１／３の長さ」が捉えられない子どもたちの要因もここにあるのではないだろうか。

本実践では「量分数」と「分割分数」を同時に取り上げ，両者を比較することで基準となる１に着目させることで分数の概念をつかませたいと考えている。

（２） 教科・領域提案とのかかわり

本年度の複式研究テーマは,『問いがつながる複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～』算数科の研究テーマは『子どもがつなぐ算数授業～解釈と共有を軸にして～』である。複式学級では，授業の中で子どもたちがより主体的に思考し互いの考えを表現しながら紡ぎ合い学習内容を確実に身につけていくことが重要となる。その手立てとして,以下のことを大切にしたい。

①課題を的確につかみ見通しをもち学習に向かうことができるような課題設定

②知的好奇心をくすぐり，主体的な学びに向かうことのできるような課題設定

③絵図や具体物など視覚的や操作活動を通して思考を共有し深められる課題設定

課題を的確につかみ，自分の考えや疑問をもったとき子どもたちの能動的な活動が始まる。また，それらの考えや疑問に対して新たな思考が加わったとき学びは再構築され，課題意識は深化する。複式の子どもたちが，互いを豊かに表現し合い主体的に活動する姿を実現することで学びを深めていきたい。

３．単元目標

３年生	４年生
◎分割分数としての分数の意味,端数を表す分数の意味や表し方について理解できるようにする。同分母の分数の加法及び減法の計算ができる。	◎分割分数としての分数の意味,端数を表す分数の意味の理解を深める。同分母の分数の加法及び減法の意味について理解し,それらを用いることができるようにする。

４．単元計画

３年

一次　分割による分数の表し方「１mの１／〇という表し方

真分数の意味と表し方（本時）

連続量の分数の表し方

二次　数としての分数の意味と単位分数の何個分という見方

数直線上の分数

分数の大小比較と等号不等号による表示

三次　同分母分数の加法・減法

４年

一次　分数の分類（本時）

真分数と仮分数の定義

帯分数の定義，仮分数と帯分数の関係

帯分数の仮分数表記

二次　同分母分数の加法・減法の立式と計算の仕方

帯分数の入った計算

三次　等しい分数の理解

５．本時について

「割合分数」と「量分数」の混同がどうして起こるのか。「出合う時期のずれ」が要因として少なからず挙げられるのではないだろうか。出合う時期が違えばそれらを比較する機会もない。比較する機会がなければ，それぞれの分数のもつ意味の違いを感じることも難しい。

さらに，分数との出合いから２つの分数の意味を意識せず学習が進んでしまうと，子どもたちがその違いに気づくことはさらに難しいこととなってしまうのではないだろうか。

本実践「分数」では，単元の導入において「量分数」「分割分数」を並行して取り上げ，具体的な生活事象と照らしたり具体物を操作したりしながら学習を展開していきたい。２つの分数を比較して捉えることでその違いに気づき「基準となる量１」に目を向けることにより分数の概念を形成する姿を目指したいと考えている。

総合的な学習の時間 ５・６年Ｆ組	紀州材のことを知りつくそう ～紀州材元気プロジェクト～	矢出　大介

１．単元について　（※総合的な学習の時間を総合と表示する）

５・６Ｆの子どもたちは,何を知っているか,何ができるかといった知識・技能面での学びはできた。しかし,学んだことを活用してどのように社会と関わりよりよい人生を送るかといった学びに向かう力についてはまだ十分ではない。そこで,紀州材を取り巻く環境を考えることを入り口として,紀州材に思いをもって仕事をしている人々の思いに寄り添い,学んだことをそれぞれのグループに分かれて映像にまとめていく。このような学びを通して,思考力・判断力・表現力と学びに向かう力・人間性を高める学びにしたい。

２．単元設定の理由

（１） 本実践の主張点

【複式】　異学年の課題を同じものに揃えることで，主体性をもって異学年の交流が生まれるであろう。 【総合】　和歌山の紀州材を取り巻く課題について単元の終末の姿を具体的にイメージして話し合うことで，自分の考えを深めることができるだろう。

【複式】本単元では，異学年で学びを共有しながら進めていく。しかし，自分たちの学びを整理・分析したり発信したりする際，それぞれの学年が他教科での学びを生かす。それにより，異なる学習経験をもつ学級集団であるからこそ関わる必然性が生まれ，主体的に交流する姿につながるだろう。

【総合】子どもたちが地域の人やその道の専門家と出会うことで，今まで知らなかった事実を発見したり，その人たちの真剣な取り組みや生き方に共感したりして，自分にとって一層意味や価値のある課題を見出すことができる。本単元では「和歌山の森林の未来はどうなるのだろうか」という課題について，紀州材に関わっている人たちに出会う機会をもつことにより，課題意識をより一層深められると考えている。子どもたちが，出会う人たちから学んだことを大切にして課題に向かって本気で追究してほしい。そして，学んだことを発信していくことで，さらに自分の考えを深めていくだろう。

（２） 教科・領域提案とのかかわり

【複式】 問いがつながる複式教育 ～学び合いの場を生み出すみとりと支援～	【総合的な学習の時間】 探究する学びをつくる ～多様な視点で探究する子ども～

【複式】「問いがつながる」ことに重点をおいている。そのために，子ども一人一人の課題意識を大切にし，友だちの問いに共感したり，反論したりするなど，友だちの考えを取り入れることを大切にしている。そして，みんなの考えの中から，みんなが追究していきたい問いを見つけていく。

【総合】抽象的な課題であれば，解決の道筋がすぐに明らかにならず，唯一の正解が得られない。みんなで「和歌山の森林の未来はどうなるのだろうか」について考えていても，個別に追究する子どもの課題が多様であれば，お互いの情報を話し合い，練り上げていくことができる。そのため，子どもたちは自らの知識や技能等を総動員して，自分には何ができるかという目の前の具体的な課題に粘り強く対処し解決しようとする。このような学びを積み重ねることで多様な視点で探究する子どもが育つと考える。本単元の調べ学習では，紀州材に関わる様々な人たちに出

会ったり，多くの人への聞き取り調査をしたりなど，紀州材への願いを知っていく。そして，自分たちに何かできないのかと考えることを願っている。

（3） 問い続け，学び続ける子どもたちをめざすために

① 課題を自分のこととして捉えて進んで調べようとする子ども

課題に対して，紀州材に関わっている人たちの思いに寄り添うことで，自分のこととして考え，課題に向かって調べ学習を行う。

② いろいろな人とかかわる子ども

課題解決のために出会う人たちに自らの考えや疑問を伝えることができ，まとめたことを話し合ったり，周りの人に発信したりすることにより，新たな課題を見つけることができる。

３．単元の目標

和歌山の紀州材を取り巻く問題を解決しようとする活動を通して，多面的に追究する方法を身に付け，そこにある問題を主体的に見出し，仲間と協力して課題を解決するとともに，自己の生き方を考える。

４．単元計画　全２５時間

１　森林体験
２　森林体験の学びを話し合い，課題を決める
３　和歌山県の林業振興課の人とＭ林業のＮさんの話を聞く
５　林業振興課とＮさんの話で気づいたことを話し合う
４　建築資材として紀州材を使用している設計士Ｔさんの話を聞く
５　林業従事者Ｔさんの話を聞く
６　学んできたことをもとにみんなで話し合う
７　映像作品関係のプロの人に映像の撮影方法を教えてもらう
８　今までの学びを振り返り，自分の考えをまとめる
９　課題について話し合う。本時
１０　映像作品を作成していく
１１　プロの写真家に映像作品を見てもらい，作品の作り方を教えてもらう。
１２　課題解決のために活用した映像作品について話し合う。
１３　映像作品を作成する
１４　映像作品について話し合う
１５　映像作品を
作成する。
※完成した映像作品は和歌山県の林業振興課と紀州材のPR動画やＭ林業のPR

５．本時について

和歌山の森林の未来について話し合うことは，小学生にとって難しいかもしない。それは，子どもたちにとって紀州材は，決して身近な物ではないからである。しかし，紀州材に携わっている人々の熱意が子どもの学ぶ意欲を高めてくれた。本時では，人々の思いに寄り添って生まれた課題について話し合い，自分たちの考えを練り合う場になることを願っている。また，課題に対して調べたり分かったりした知識だけではなく，「ひと・もの・こと」との出合いを通して感じた思いや願いを大切にした熱意あふれる話し合いを見ていただきたい。